



## 1 2025年産 米「食味ランキング」

本年も2月27日に、日本穀物検定協会から、2025年産米の「食味ランキング」が発表されました。対象となった144産地品種のうち、最高位の「特A」に格付けされたのは43産地品種で昨年より4つも増える結果となりました。「A」は71産地品種、「A'」は30産地品種でした。

注目すべきは、「特A」に評価された43の銘柄のうち、半数以上の23品種が高温に強い品種で占められていたことです。また、北海道や東北、北陸では作付け時期を早めるなどの高温対策が功を奏し、12銘柄でランクが上がりました。さらには、産地・品種による評価の変動も激しく、富山県産の「てんこもり」が「特A」に輝いた一方で、同県のブランド米「富富富」は評価を落として「A'」となるなど、同じ産地内であっても品種間で評価が分かれる結果となりました。

全体的に、気候変動への対応が評価を左右する結果となり、栽培時期や栽培技術での対応だけでなく、高温耐性品種の採用など、新しい品種のトレンドが感じられるランキングとなりました。

### 2025年産米の食味ランキング

産地	地区	品種名	ランク(年産)		
			24	23	22
北海道		ななつぼし	特A	特A	特A
		ゆめぴりか	特A	特A	特A
		ふっくりんこ	A	A	A'
秋田	県北	あきたこまち	A	A	A
	中央	あきたこまち	A	A	A'
	県南	あきたこまち	特A	特A	特A
	中央	ひとめぼれ	A	A	A
新潟		サキホコレ	特A	特A	特A
	上越	コシヒカリ	A	A	A
	中越	コシヒカリ	A	A	A
	下越	コシヒカリ	A	A	A'
	岩船	コシヒカリ	A	A	A
	魚沼	コシヒカリ	特A	特A	特A
	佐渡	コシヒカリ	A	A	A
富山		こしいぶき	A	A	A'
		コシヒカリ	A	特A	A
		てんこもり	特A	A	A
石川		富富富	A'	A	A
		コシヒカリ	A	A	A
福井		ゆめみづほ	A'	A	A'
		コシヒカリ	A	A	A
熊本		ハナエチゼン		A'	A'
		いちほまれ	特A	特A	特A
	県北	ヒノヒカリ	A'	A	A
	県北	森のくまさん	A'	A	特A
三重	県北	コシヒカリ			A'
	北勢	コシヒカリ	特A	特A	特A
	中勢	コシヒカリ	A'	A'	A'
滋賀	南勢	コシヒカリ	A'	A'	A'
		コシヒカリ	A	A	A
愛知		みずかがみ	特A	特A	特A
		あいちのかおり	A	A	A
		コシヒカリ	A'	A'	A
	三河 中山間	ミネアサヒ	特A	特A	特A
岐阜	美濃	ハツシモ	A	A	A
	美濃	コシヒカリ	A	特A	特A
	飛騨	コシヒカリ	A	A	A
静岡		コシヒカリ	A'	A'	A
	東部	きぬむすめ	特A	特A	特A
	中部	きぬむすめ	A	A'	A
	西部	きぬむすめ	A	A	特A
三重	西部	にこまる	特A	特A	特A
		伊賀	コシヒカリ	特A	特A
熊本	北勢	コシヒカリ	A'	A'	A'
	中勢	コシヒカリ	A'	A'	A'
	南勢	コシヒカリ	A'	A'	A'
熊本	県北	コシヒカリ	A	A	A
	県北	くまさんの輝き	特A	特A	特A
	県北	コシヒカリ	A	A	A
	県南	くまさんの輝き	A	A	A

\* 「米の食味ランキング」とは：日本穀物検定協会が1971年から開始したもので、産地品種ごとに「特A」「A」「A'」「B」「B'」の5段階の格付けを、複数産地の「コシヒカリ」のブレンド米を基準にし、外観、味、粘り、硬さ、総合評価の6項目で、専門評価員100人が試食して「主観的」に評価をしています。

## 2 水稲主要害虫:カメムシの種類と特徴について






近年、カメムシ類による斑点米被害や、吸汁による不稔(籾の充実不足)が深刻化しています。品質低下による一等米比率の低下に加え、収量減少にもつながることから、発生するカメムシの種類や特徴をしっかりと理解して、防除時期を的確に把握し、適期防除を徹底することが重要です。

〈なぜカメムシ被害が増加しているかの背景?〉

- 1) 温暖化の影響: 冬季の気温上昇により越冬個体が増加し、さらに夏季の高温によって発育速度が早まることで、例年より1回多く世代交代が進み、個体数が急増しやすくなっています。
- 2) 耕作放棄地や管理不足の雑草地の増加: 高齢化や労働力不足により、畦畔や農道、周辺雑草地の管理が不十分となり、これらがカメムシ類の絶好の生息・繁殖場所となっています。
- 3) 薬剤抵抗性の出現: 長年にわたり同系統の薬剤を使用し続けた結果、薬剤への抵抗性をもつカメムシが現れています。
- 4) 「イネカメムシ」の発生: 近年になり西日本を中心に再び発生が見られ、水稲への被害を拡大させています。

〈主なカメムシ類の特徴〉

斑点米カメムシ類は、主に畦畔や農道に生えたイネ科雑草の穂などをエサとして生息し、出穂期以降に成虫が水田へ侵入します。登熟期に籾を吸汁されると、斑点米や不稔が発生し、多発時には品質・収量の両面に大きな影響を及ぼします。種類によって発生回数や食性、越冬態が異なるため、発生状況に応じた対策が必要です。

カメムシ科		ホソヘリカメムシ科	ヘリカメムシ科	カスミカメムシ科
イネカメムシ	ミナミアオカメムシ	クモヘリカメムシ	ホソハリカメムシ	アカスジカスミカメ
				
体長:12~13mm 食性:イネ科 発生:1回/年、 成虫越冬	体長:13~14mm 食性:広食性 発生:3~4回/年、 成虫越冬	体長:15~17mm 食性:イネ科 発生:2~3回/年、 成虫越冬	体長:8.5~11mm 食性:イネ科、 タデ類 発生:2~3回/年、 成虫越冬	体長:4.6~6mm 食性:イネ科、 カヤツリグサ科 発生:4~5回/年、 卵越冬

穂ばらみ期

出穂期

登熟期

乳熟期

糊熟期

黄熟期

完熟期

アカスジカスミカメ

イネカメムシ

ホソハリカメムシ

クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ

〈カメムシ類の防除基本方針〉

カメムシ類の防除にあたっては、薬剤散布による直接防除に加え、発生源をつくらないための雑草管理が重要となります。カメムシ類は雑草地で増殖し、稲の穂が出る時期に合わせて水田内へ移動するため、畦畔や農道、周辺雑草地の管理を徹底する必要があります。ただし、除草作業を出穂直前に行くと、雑草地に生息していたカメムシを圃場内へ追い込むおそれがあります。このため、除草は、出穂の2週間前までに終わることが望ましく、薬剤散布は、穂揃い期中心に適期を逃さないように防除することが重要です。

- 1) 周辺地域の(畦畔、農道等)雑草管理: 出穂前の早い段階(出穂2週間前まで)で行います。
- 2) 1回目散布: 穂揃い期(出穂から数日後)水田に飛来した直後の成虫を防除し、産卵を抑制します。
- 3) 2回目散布: 1回目散布の7~10日後に、その後に飛来する個体や、水田内で孵化した幼虫を防除します。